

各区長宛の通牒と、全市民に対する諭告を發してその徹底を期しております。捕虜のうち、満洲軍将校は環翠亭（常盤丁）・望城館（北三番丁）に、樺太軍将校は五柳園（本櫓丁）に、海軍将校は土木監督署跡・北川亭（北四番丁）・五城館（東三番丁）に、陸軍下士兵は宮城野原新築收容所に、それぞれ分散收容しました。このようにして、やがて11月27日及び12月16、17日に全員が仙台を離れて帰国の途につきました。この9か月間、市民の接遇と当局の措置よろしきを得たため、きわめて平穏かつ友好的に終始し、全国の收容所中、最良の成績を収めたといわれます。「宮城県史」第12巻に『日露戦役のロシア軍の捕虜は、中将以下将校千四百三十八人、兵卒七万五百二十五人であった。このうち約二千余人が仙台市に收容された。将校は自由外出を許され、片平丁旧制第二高等学校テニスコート〔現東北大学構内〕にきて学生を相手にラケットをふりまわすなど、政府も温く待遇した。……』と記しています。仙台出発にあたっては、官民が心をこめて駅頭に見送る等の配慮を尽したので、リャプノフ中将は捕虜団を代表して、留守第二師団長山内中将宛感謝の書簡を送ってきた程でした。收容中1名の病死者があったが、市内陸軍墓地〔現在の常盤台霊園〕に丁重に葬り、いまだに香華も絶えず墓碑も現存しています。以上がロシア捕虜收容の概略です。資料には次のものがあります。⁽¹⁾

1. 宮城県史第7，12巻
2. 仙台市史（明治41年刊）
3. 秒時計（半沢正二郎）
4. 宮城百年（毎日新聞社）

なお、第2次大戦時の捕虜は仙台市に入っておりません。

注(1) 墓表に「露国陸軍列兵ショーマリプキン之墓、明治三十八年六月四日病死」と刻んである。

45. せんだいはぎとみやぎのはぎ との違い

問 「仙台市史統編」第2巻の815ページに『宮城野には無数の萩が植えられ、^{×××}仙台萩の名所として自然がそのままに残されて、奥床しく観光に一役買っている。』とありますが、せんだいはぎとみやぎのはぎとは同じものですか。

答 仙台地方ではぎという場合みやぎのはぎのことを指していいいます。これを、殊更に、或いは不用意にせんだいはぎといえは、全然別な植物になりますので注意を要します。両者の大きな違いは、「せんだいはぎ」は春に黄色の花を開き東北以北の海岸に自生するまめ科せんだいはぎ属の多年生

草本、「みやぎのはぎ」は秋紅紫色の花をつける栽培種で、まめ科はぎ属の、やや草本性の低木であることである。宮城野は、古来みちのくの歌枕、萩の名所として知られたところですが、戦後いちぢるしい変貌をとげ、貨物駅や総合運動場が場所を占め、昔日の面影は失われてしまいました。僅かに競技場の土手などに移植された「みやぎのはぎ」が、王朝時代の歌枕へのそこはかかない思慕をつなぎ止めているに過ぎません。したがって、御質問の萩はみやぎのはぎであって、^{×××}仙台萩とあるのは誤まりです。なお、^{××}せんだいはぎに^{××}仙台萩という漢字を当てているのも適当ではありません。このことについて、「牧野日本植物図鑑」に次のように書いてあります。『せんだいはぎの名は千代萩で、この草は北地の産、仙台も北地、その仙台に関係ある千代萩の成語があるのでこの名をとってこの草の名とする』。また一説に、海浜の船台のあるあたりによく自生するところから、[●]船台萩と表記するものもあります。

注(1) 音は「しゅう」。漢字としては、よもぎ、ひさぎの意味以外にない。わが国で「はぎ」と読ませて使っているのは、秋の草〔艸〕の筆頭であることによる作字（国字）である。漢語では、はぎのことを胡枝子と書きあらわす。はぎは秋の花として古くから人々に愛好されてきた。「萬葉集」巻8、山上憶良の歌『秋の野に咲きたる花を指〔および〕折りかき数ふれば七種〔ななくさ〕の花 萩の花尾花葛花なでしこの花女郎花〔おみなえし〕また藤袴朝顔の花』をはじめ、はぎは万葉集に唱われた植物中最多第1位を占め138首にのぼっている。「郷土研究としての小萩ものがたり」（藤原相之助）のはしがきに『小萩の萩の字は、日本でハギに用ゐてますが、支那ではヨモギの類の草の名なさうです。支那のハギは胡枝子（本草家は天竺草）で詩にも胡枝と詠じて居ります。日本で万葉集には榛、藁、或は芽子をハギと訓ませ、その榛は大萩のカハギ、藁は灌木のコハギ、芽子はクサハギだといふ人もあります。（平安朝になってから、ハギにあてて萩といふ国字をこしらへたのは、秋の艸〔くさ〕といふところからでせう）』とある。万葉以後も古歌に詠まれた「宮城野の萩」は多い。但しその「みやぎのはぎ」〔俗名〕の实物は「みやぎのはぎ」〔植物学上の和名〕とは異なり、今日も仙台周辺に自生するような、きはぎ・つくしはぎ・やまはぎ等が主体ではないかといわれる。正平5～6年〔1350～1351〕頃来遊した宗久〔筑紫の連歌師〕の紀行「都のつと」にも『中にももとあらの里といふ所に、色なども外には異なる萩のありしを、一枝折りて、宮城野の萩の名に立つもとあらの里はいつより荒れはじめけむ……木萩とも申す……』と記してある。幕末の本草学者小野嵐山は「大和本草」（貝原益軒、宝永5〔1708〕）の宮城野萩について『宮城野ニ生ズルハギハ此ト同ジカラズ、名所ヲカリテ名ズケタルマデナリ』と頭註を付けている。また「仙台鹿の子」〔著者不詳、元禄8〔1695〕頃〕に『昔宮城野の萩にて弓を打ち鼓の胸を拵へたる名物なりと古説にあれば常の山萩の様に聞ゆ』ともある。植物学的に「みやぎのはぎ」は専ら庭園の栽培種であって、正品の野生は未だ知られず、その由来もまた不明とされ、広大な原野に

群生するものではない。

注(2) 「みやぎのはぎ」〔「みやぎのはぎ」ではない〕の名が初めて文献に現われるのは、今から約280年前、元禄11年〔1698〕刊の貝原益軒の「花譜」に『一種宮城の萩といふあり。其花尤もうるはし。其茎冬枯れて春新に根より生ず。』とある。仙台における宮城野萩栽培の歴史はわからないが、保護繁殖に努めたことは「残月台本荒萩」〔安政年間1772～1781の書、著者不明。「仙台叢書」第1巻に収録してある〕の次のような記事からうかがわれる。『綱村公萩の一ヶ所にありてもしや絶えなん事もやといひ給ひて、北山輪王寺の北・小谷管の西・中山古海道の東の山々に、嶺五つほどの地へ、此萩を植えさせ給ひしなり。萩の実を冬取り、春彼岸にうね作りして、実をまき土を少しふり置候へば悉く萌出て、翌年より花咲くとなり』。北山一帯は御留林〔諸人の立入禁止〕であったので、このためには適地であった。

資料 牧野日本植物図鑑

みやぎの萩（小原伸編）

46. 県花みやぎのはぎについて

問 県花みやぎのはぎは、いつどのようにして定められたものですか。

答 県花、正しくは「郷土の花」と称し、公募によって定められたものです。昭和29年2月、植物友の会〔現日本植物友の会〕・NHK・日本交通公社・全日本観光連盟共同主催、文部・農林・運輸各省後援のもとに各都道府県毎に地方委員会を設け、葉書投票による予選を行いました。選定の基準は、

1. 郷土の誇りとする花
2. 郷土の人々に広く知られ愛されている花
3. 郷土の産業・観光・生活などに関係深い花
4. 郷土の文学・伝説などに結びついている花
5. その地方にのみ見られる珍しい花

その結果を中央委員会がとりまとめて最後決定し、3月22日NHK開局29周年記念番組として全国向けラジオで発表されたものです。宮城県の花は96%の圧倒的多数でみやぎのはぎときました。北日本の県花を挙げますと、北海道すずらん、青森りんご、岩手きり、秋田ふき、山形べにばな、福島ねもとしゃくなげ。